

【インタビューの概要】

インタビュー日時：2021年9月1日

場所：オンライン

参加者（敬称略）：

坪井隆治、御婦人、御令嬢

中村元哉（東京大学・准教授）、鈴木将久（東京大学・教授）、池田尚広
（杏林大学・講師）

中村：事前にお送りした質問に御回答下さり、有難うございました。まず、質問事項「一、日本側の訪中団」の「(1) 訪中団結成のいきさつ」について、何か補足などございませんか。

坪井：この訪中団は、社会党の正式な訪中団ではなく、あくまでもプライベートなものでした。日中の記者交換が始まり、単身赴任の記者たちの事務所・宿舎となっていた本郷の川口アパートによく訪ねました。その頃、国会の秘書・議員の有志で日中友好協会国会支部も作りました。私たちは、その方々との付き合いが長くなり、バス旅行に行ったり、赤坂や新宿などの都心を中心に案内しました。観光というより、当時の東京の様子を知りたい、という目的のようでした。というのも、当時の治安が悪かったわけではないのですが、その頃の日本社会には、中国ときくと脅すような風潮もあったものからです。中国人は目をつけられたりしたわけです。もちろん、警察がちゃんとついていたりしてくれていましたが……。中国の記者の方々は、そういう風潮を嫌がっていました。自由に出られないものだから。それで、私などが一緒に散歩みたいに行ったり、気を配ってあげたりしていました。ですから、個人的に仲良しになったわけです。

当時の社会党は、必ずしも中国に親しみをもっていただけではありませんでした。そういう趣向をもっていった人は多数派ではなかった、と記憶しています。そういう雰囲気じゃなかった。党の内部には、色んな派がありました。まあ、口に出して中国に反対するような人は、流石にあまりいませんでしたが、それでもやはり、心の中では疎外感をもっている人たちは多くいたようです。私が訪中から戻ったあとも、同じ党のなかから、「なんでお前たちは中国に行ったんだ」なんて陰口を言われたりもしました。そういう社会的な、というか政治的な空気が流れていたように思います。ですから、私のなかでは、訪中団というのはあくまでもプライベートなもの、個人的なもの（……というと少しおかしいのですが……）であって、党の決定で議員を派遣したものとは違う、という認識です。あくまでも、個人的な繋がり、先方から誘われて訪中した、という認識です。

質問事項の回答に書きましたが、かつて原田隆治君という友人が中国に2年ぐらい行っていたことがあり、さらに細迫兼光さんも以前に中国に行ったことがあるものだから、中国人民外交学会——民間外交の窓口ですね——の人たちが、原田さんや〔日本で交流していた〕中国の記者の方がたを通じて、訪中団の話がトントン拍子ですすみました。黒田さんは社会党の中国派のトップのような人物で、その父親も社会党の重要人物でした。また、帆足さんも重要な政治家だったので、その秘書団ということで待遇が良かった面もあったかもしれません。

確か、その一年ぐらい前だったでしょうか。私は「旅券闘争」を経験しました。

中国政府の呼びかけによる青年日中交流大会に参加しようとしたら、日本政府は人数が多すぎるとして旅券を発給してくれず、それで、私たちは法務省や外務省に押しかけたのですが、結局出してもらえず、大会にも間に合いませんでした。そんなこともありましたので、私は、「中国に行きませんか」と誘われた時に乗り気でしたし、中国の記者の方がたとの繋がり——個人的なコネとでもいいでしょうか——もありましたので、参加することになったわけです。個人的な繋がりを大切にしている風潮は現在の日中間にはなくなったのかもしれませんが、当時は大事にしていたように思います。

中村：質問事項「一、日本側の訪中団」の「(2) 準備段階での先方の窓口と日本側の窓口について教えてください。(3) 訪中時の通訳は、どのような人が担ったのでしょうか。(4) 日本側の団会議での意見交換の内容について教えてください。」について、何か思い出されたことや補足があればお願いします。

坪井：中国側の通訳の方々が印象に残っています。1人は金蘇城さん、後に日本の大使館に参事官として赴任してきた人です。あと2人は若い人でした。1人は、北京の外国語大学を卒業したばかりの見習いで、カタコトの日本語しか話せない人。もう1人は神戸の大学を卒業した人で、1、2年前に中国に帰国したとのことでした。神戸で生まれ育ったようです。お二人ともまじめで素直な、非常にきちんとした若者でした。通訳の方を含め、まだ中国人はみな素直に文革が社会を変えると信じ、期待しているような空気を感じました。また、金蘇城さんは「私も皆さんと一緒に文革のことを勉強しています。毛沢東主席の言うことに間違いはないが、まだ文革とはどういうことなのか、自分たちも分かっていません」と話していました。年齢は私よりも4、5歳上ぐらいでしょう。

中村：ご回答のなかに劉徳有という人名があります。何かご記憶のことがあれば教えてくださいませんか。

坪井：最初に記者団として日本に来た人です。『人民中国』という日本向けの雑誌がありますが、もともとその編集部にいたそうで、ほかにもアメリカなど外国向け雑誌を発行していたようです。彼のことはよく覚えています。その後もお付き合いが続いている人たちのなかでも、劉徳有さんは特に目立つ人でした。当時いろいろと話を聞きに行ったなかで、名前を覚えているのは劉徳有さんぐらいです。政治家というよりも通訳から始まって雑誌の記者をしていた人ですが、後には中国の文化部副部長にまでなったぐらいですから、異例の出世をされたともいえますね。日本語の著書も、日本語と中国語をテーマにしたものなど、2、

3冊出しています。ひと頃はずっと『人民中国』にもいろいろ書いていました。この人は行動的などころがあり、初めて来日した頃に日本政府をちょっと怒らせたことがあります。デモをやっているのを取材で道端から見ている、そのうち一緒になって「佐藤内閣打倒！」というようなことを言って手をあげたそうです。それが日本の法務省などから、そういうことを日中の記者がするのはけしからん、日中協定違反だとクレームをつけられ、国会の委員会でも問題になったことがあります。結局それはうやむやで終わるのですが、そういうわりと派手な、目立つ感じの人でした。

中村：どういうふう日本語を勉強されたのかご存知ですか。

坪井：直接本人から聞いた記憶はありませんが、大連の育ちで、日本人と同じ教育を受けたのではないかと思います。日本語を後で習った人にみられる癖のようなものはありませんでした。日本語がよくわかるという背景があって、雑誌の仕事で大連から北京に行ったということをお聞きしたような気がします。

中村：大連のご出身ということだと、旧満洲国の人たちと関係があったとか、そういう話を聞いたことはありませんか。

坪井：ありません。年齢からいって、私と1つか2つぐらいしか違わないと思います。いま91、2歳じゃないでしょうか。戦時中、満洲のほうにいたときはまだ学生だったでしょうから、政治的背景がマズイということはないと思います。

鈴木：日中の記者たちと湘南にバス旅行をしたというお話が出ていて、興味深く感じました。日本でどんなふうに中国の記者たちと付き合っていたのか、教えていただけますか。

坪井：劉徳有さんのことですが、先ほどお話ししたような経緯がありましたから、日本国内では、たとえば神奈川県まではいいけれど静岡県からは事前に届け出をしなければ旅行はできないとか、そういう制限がありました。私たちの訪中団のまとめ役の原田隆治君という山口の人がいたのですが、彼は旅行の後にすぐ秘書を辞めて、政治を離れて、萩焼を始めたんです。その彼のところに、劉さんが突然許可も取らないで汽車に乗って訪ねてきたというんです。「劉さん、許可も取らないで、後で問題になるぞ」と心配した原田君は、山中に据えた萩焼窯の近くにあった、簡単なレストラン付きの宿に泊めた。翌日すぐに「中国人が来たらしいが」と公安が訪ねてきて、だいぶ気を揉んだという話を原田君から聞きました。劉徳有さんはそういうふう、気さくな方でしたが、小さなことにあま

りこだわらない一面もあったようです。

湘南のバス旅行は、バスを1台借り切って、中国の方は招待で7、8人お見えになっていました。その頃は記者団の人以外は来ていなかったと思います。廖承志事務所に来ていた人は何人かいましたが、その人は記者ではなく政府に所属している人で、気楽に付き合うという感じではありませんでした。記者の人も、必ずしも新聞などの記者ではなくて、別の仕事をしている人が記者の資格で来ているというような形でした。

池田：帆足計さんはどのようなお人柄でしたか。

坪井：私は大学を終える直前、帆足さんの議員会館事務所でアルバイトをしたのが機縁で、公設の秘書になりました。以来12年秘書を勤め、その後も私の人生は帆足さん抜きには語れません。

帆足さんは東大卒業後、現在の経団連の母体である日本経済連盟に就職。大正から昭和の初めにかけての財界のリーダーであった郷誠之助男爵が会長でした。郷会長の秘書役を勤めて人生の薫陶を受けた、とよく聞かされました。学生時代はマルクスボーイでもあった由で、大内兵衛門下生の中でも目立った存在だったそうです。昭和16年に太平洋戦争が始まった頃には重要産業協議会の事務局長として当時の軍需省事務次官であった椎名悦三郎氏と組んで、戦時統制経済の調整役として活躍したそうです。

頭の回転が早く、読書力が秀でていました。本を読んで要点を掴むのがとても速く、良い本があれば周りにも買って勧めていました。

影でこそこそ策謀して人を貶めるというようなことはできないタイプの人でした。

私は12年間帆足さんの秘書を務めましたので、ずっと付き合いはありました。若くして出世した人です。経団連の母体に当たる重要産業協議会とか日本経済連盟会とかがあって、彼は35歳でその事務局長になったんです。当時の財界の指導者は貴族出身の團琢磨で、大正の終わりから昭和の初めまで財界をリードしました。その人が会長のときに、帆足さんは東大を卒業して経済連盟に就職したんです。そこで秘書になって、32、3歳の頃、昭和16年に戦争が始まります。その頃に彼は事務局を率いるトップとして調整係になるんです。いろいろな船会社を統合して戦争に協力させるとか、戦車をつくるときに現在の八幡製鉄とか川崎製鉄とか製鉄所を統合して、陸軍省と相談しながらタンクをつくるとか。そういう割り当てをするという意味での財界のまとめ役を、専務理事、事務

局長として 35 歳でやっているんです。東大に在学中から、経済の有名な先生の門下生のなかで一番優秀だったといわれるくらい、頭の回転が速かった人ですね。ただ人間的には、鼻につくような、ペダンチックなことも言うし、口があまり丁寧ではなくてね。気はいいんですが、他人のことを痛烈に批判することがあるものだから、憎まれることもありました。後で社会党を追われたりもしています。悪気は全くないし、裏のある人ではないのですが、本人をよく知らない人のなかには、鼻につくと感じる人もいたようです。身近にいと可愛いくらい素直でした。鼻っ柱は強いんですけども。

中村：気楽な交流の場で訪中が決まったということを先ほど伺いましたが、一方で北京のメンバーを見ると、重要な人物が名前を連ねていますね。坪井様たちの団体も一定の期待をされていたことが窺えます。このときにお会いされている張奚若という人、あるいは肖向前という人について、さらに補足があればお願いします。

坪井：中国側に期待をされていたから招かれたということではないと思います。まあ友達だから気楽にいらっしゃい、という感じでした。ただ北京に行って周恩来首相と会見できたのは、ちょうど運が良かった。社会党の石野久男さんと、枝村要作さんという山口県から代議士になった人が、たまたま私たちより 1 日か 2 日早く来ていたんです。私たちの団だけで周恩来首相と会見したわけではなく、お二人と一緒にだったからこそ実現したのだと思います。千葉県の市議会議員友好団 3 名も一緒でした。肖向前さんのことは帆足さんからよく話を聞いていました。「自分〔帆足さん〕が中国に行ったときにパンツの世話までしてくれた」と冗談半分に言っていました。肖向前さんは本当に柔らかい感じの方で、後に日本に代表としていらしたり、大使館に赴任して来たりしました。帆足さんが自宅に何度か招いたりなど、そういう付き合いがあったものですから、私もよくお会いしたり、食事したりしたことがありました。

中村：肖向前という人は中国が日本との関係を構築するうえで重要な人物だと思われましたか。

坪井：やり手とか、そういう感じではなかったですね。本当に物腰柔らかい。日本留学時は東京高等師範学校に通われていたかと思いますが、偉ぶるとか、主義主張を語るとか、そういう感じはなく、にこやかで、柔らかい、優しい感じの方でした。

中村：いま残っている当時の史料からすると、中国側にはしばしば肖向前さんの名前が出てきますので、やはり実務の面で重要な、影響力のあった人なのだろう

と思います。

坪井：国交回復する前の、日本担当としての役割は、要するに事務をやる、ということだったと思います。いまでいうと内閣の特別参事官のようなものでしょうか。孫平化さん、肖向前さん、王曉雲さん、それからもう1人。その3、4人が日本に留学していたりした人で、日本語堪能でした。日本担当の、いうなれば周恩来を支える実務家——政治家ではなくて——ですね。そんな三羽鳥といわれたのが、孫平化、肖向前、王曉雲でした。その頃よく周恩来から、「“孫”悟空が“雲”に乗って、“前”に“向”かう。そういうふうにやらなきゃダメじゃないか」と発破をかけられて頑張ったとか。そういう裏話といますか、喩え話があったぐらいです。確かにその3人が実務的なところを進める役割を担っていたでしょう。

中村：北京でのこのような交流の際には、郭沫若といった文化人とお会いすることがままあります。

鈴木：もし郭沫若に会った印象があれば聞かせてください。1968年というのは文化大革命のなかでも微妙な時期だと思います。郭沫若も批判を受けていますが、そのあたりでご存知のことはありますか。

坪井：旧正月休みに入るので、ひとまず北京に戻りました。中国側の職員の人たちも休みになるわけです。この数日間、私達も北京飯店ホテルで一息ついていて時、郭沫若さんが皆さんのために話をしてくださることになった、と人民大会堂内の小さな一室に案内されました。私達6名と金蘇城さんたち3名が円卓に膝を突き合わせるように郭沫若先生を囲んで、3時間あまりの講座でした。話の内容は私の記録ノートに書いていますが、国際情勢からプロレタリア文化大革命など多岐にわたりました。

1967年には郭沫若先生はプロ文革運動で批判され、「今まで私が書いた論説は全て誤っていた。焼いてしまいたい」という自己批判が報道されていました。そんなことが私の心底にあったのかもしれないが、このときの先生はあまり元気がなく、覇気がないような感じを受けました。毛主席に媚びるような言い方も感じられて、気になったことを覚えています。後年、その頃の郭沫若先生を取り巻く文化革命運動の状況はかなり厳しいものがあったことを知りました。日本でいう文部大臣とか、いろいろな学会や学術会議の議長レベルの偉い方だという話だったので、私たちだけのために3時間も割いてくれるのはありがたいと、私なんかは思いましたが、偉い大学の委

員長をするような方が媚びている、それが郭沫若さんの話を聞いたときの、私の内心の感じ方でした

たとえばほかの方、周恩来首相は会見したときに毛主席をもち上げるようなことは一言も言いませんでした。バッジもつけていない。写真を撮るときだけはつけてきたのかな。その頃はみんな批判されまいと思って身を守っていたんですね。周恩来首相にはそういうところは感じられませんでした。ただ一言だけ、周恩来の会見のなかで印象に残っているのは、いま中国はプロレタリア文化大革命を毛沢東の指導のもとにやっているが、中国の人民というのは力があるんだ、若い紅衛兵が何十万と集まってデモをやっている、アメリカ帝国主義に負けないために、現実的に負けないんだ、と、そういう言い方をされたことです。あとは文化大革命の話は全くしませんでした。当時北京ではバッジをつけるのが流行っていたんです。どこに行っても、1つではなくて2つ、3つ、つけているんです。でも周恩来はつけていない。初めてバッジをつけていない人を見ました。後で写真を見たらつけていました。郭沫若と周恩来にまつわるその印象を、いまでも忘れられません。

私がまだ早稲田大学の学生だった頃、郭沫若さんが日本に来ていて、大隈講堂で行われた大山郁夫の葬式に参加していたのですが、そのとき、郭沫若さんが講演をするというので私たちも聞こうと思って行っただけで、もう人が外まで溢れていて入れなかった、そんな話もしました。

池田：郭沫若さんのような要人ではありませんが、出迎えに来た革命委員会と彼らに打倒された人たち、という話がありました。それはどういった人たちに見えましたか。

坪井：中国に滞在している40日の間に、工場や人民公社を訪ねました。その頃はすでに各単位で革命委員会という組織が成立していて、そういう意味では安定していた。武闘なども終わっていたんです。だから私たちも旅行ができたのだと思います。

現地の革命委員会は前の幹部を全員追放して、自分たちが革命の基本になっていくわけですが、そこで、どういうふうに革命委員会が成立したか、という話をするわけです。そのときに、打倒された前の工場長が部屋の隅っこ、脇のほうにいるんですよ。連れてきているわけです。話をしている人は革命委員会の主任です。

2、3の病院も訪問しましたが、そこでも、追放された、もともと偉かった人たち、それから病院の革命委員会を代表している人たち2、3人が来て話をする。この病院では文化大革命の運動のなかで、周りの誰彼を追放して、私たちは革命委員会を成立させた、という経緯を皆が話すわけです。隅でしょぼんとしている人がその前の長だった。革命以前の主任だったお医者さん、つまり院長のよう

な人が隅っこでしょぼんとしているわけです。対して話をしている人は、前は掃除夫をしていたという。そんな感じです。ほかの病院でも、お医者さんの手伝いをしていた雑役の人がお医者さんになった、という話を聞きました。おかしい話じゃないか、とこちらからは言えませんが、ちょっと私の感覚では理解できないことが多かったです。

中村：文化大革命は、軍による統制が利き始めたこともあって、1968年の段階で一旦落ち着きますが、それは坪井様がお話くださったエピソードと合致します。上海では特に重要な人にはお会いしなかったと書かれていましたが、そこにはそうした背景があったのだと思います。上海は文革のときに独特の展開を見せていたので、その時期に新しい革命側の人たちが台頭していくなかで、状況はまだ混乱している。そんな時代ですから、そんなにいろいろな人たちとは会えないということになります。

ですから坪井様のご記憶と記録は、1968年を文化大革命の一つの区切りとする、という定説を示すものにもなっています。それを補足したうえで、訪中時の印象について質問させてください。1968年1月に訪中されたときは非常に穏やかだったと仰っていましたが、街中も平穏だったという印象でしょうか。北京、上海、どこのお話でも結構です。

坪井：そうですね。全くそういう騒ぎはなかったです。ただ壁新聞は見られました。それから地方の都市に行くと、文楽隊とバンドが来てドンチャンするんです。どこに行ってもあの頃に流行った「大海航海靠舵手」という毛沢東を讃える歌や「紅太陽」が聞こえてきて、夢にまで出てくるようでした。地方の街に行くと、駅前からさっそくそれが聞こえてきて、もう頭が一杯になる。そのぐらい流行っていました。ただ平穏ではあり、武闘とか、そういうものはありませんでした。一度だけ、緊張したというほどではありませんが、井崗山に行ったときには、鉄砲を持った4、5人が乗ったジープが〔護衛として〕後ろからついてきてくれました。あとは全く何もありませんでした。

中村：都市間の景色はどういった様子でしたか。普通の平穏な景色でしたか。

坪井：平穏で、殺気だった感じは何もありませんでした。後で文化大革命初期の話を知ると、武闘だとか拷問だとか、かなり壮絶だったんですね。私が行ったときにはそういうものは何もなかったです。あのときにはもう、みんな「終わった」と感じていたのではないのでしょうか。革命委員会がすべて出揃ったというお祝いのドンチャン騒ぎをやっていましたから。街に掲げるスローガンにも、たとえば長沙市なら「長沙市の革命委員会成立万歳」、それから「毛主席万歳」というのが駅などに出ていました。

(休憩)

鈴木：ノートには数字まで詳細な記録が残されていて印象深く拝見しました。各種のデータについては国内外を含めて得られる機会がなかったなかで、いろいろな数字を出して頂いていました。同時に、皆が自身の言動による禍を恐れてピリピリしていた、という印象があります。このあたりについて何か補足していただけたらと思います。

それから、ここまで細かい資料を残そうとなさったのは、やはり帰国後にこの資料を何らかの形で役立てようということを坪井さん自身が中国にいる間から強く意識されていたからかと思います。そのあたりについても教えていただければと思います。

坪井：書いて勉強したものを本に出すとか、そういう意識は強くはありませんでした。また、中国の文革に倣って、日本でも革命運動の一線に立って頑張ろうとか、そういうことはあまり考えませんでした。帰国後のその年の暮れに解散選挙があり、帆足さんは派閥の争いから公認を取り消され落選。私も秘書を辞めて進路と生活も不定で社会党にも失望しました。自分でも忘れていましたが、いま読み返してみると、いろいろなことを書いていて良い資料だと思います。せっかくなら本にして出してみればよかったなど、久しぶりに——54、5年ぶりぐらいに——全部読んでそう思いました。

中村：いろいろな数字を教えてもらったということですが、文革中ですから、毛沢東に都合のいい数字がたくさん出ている可能性があります。少しでもそれに反するような数字を出すと批判されてしまう、というような緊張感は、北京や上海でお感じになりましたか。

坪井：そういうものはあまり感じませんでした。ただ、たとえば中国共産党員は14億のうちの1億何千万人とか、そのようなパーセンテージは、同行した金蘇城さんからの特別講座がほとんどです。工場などの革命委員会では、全国的な統計をもち出す人なんていません。団体のなかの革命委員会の話をするだけです。ノートには中国全体のまとまった統計的な数字が散見されますが、それは金蘇城さんによる私たちに対する講義を書きとめたものですね。中国のことを知ってもらいたいと思ったのでしょうか。ああいう数字は秘密でもなんでもなかったのだと思います。

中村：2つ質問をさせてください。1つ目は、この時期、社会党は中国とコンタクトを取る際にどのような人脈を一番重視していたかということです。そして、

実はこの時期、佐藤首相も密かに様々なルートを使って北京と接触していました。これは史料から明らかです。そういった自民党の密かな動きを社会党の方々にご存知だったかどうか、というのが2つ目の質問です。いかがでしょうか。

坪井：自民党のそのような動きについては、私はもちろん、社会党のなかでもほとんどの人は知らなかったのではないのでしょうか。後に公明党の人が、田中角栄さんの訪中前に、池田大作さんなどを通じていろいろなことをやっていますね。そういうことも後で知った感じでしたから。

中村：自民党は昔の満洲国関係者や汪精衛政権関係者のルートを辿ってパイプをめぐらせていたようです。北京の側も、すべては信用できないにしても、いくつかはパイプをつなごうとしていた。ですから、ほとんどは機能しなかったとはいえ、実は公明党以外にも様々なルートがあった。そのこともほとんどの社会党の方はご存知なかったということでしょうか。

坪井：知らないと思います。帆足さんなどもそんな話は何もしていなかったと思います。ほかの人も同じだと思います。

中村：社会党の方々には特に中国側の誰を頼りにしていたのでしょうか。

坪井：帆足さんの場合だと、やっぱり肖向前さんとか、そういう人には自分から会っていろいろと話をしていました。それから、貿易会の会長とか、当時の中国の様々な部門のトップの方たち。そういう人たちとは年賀状などもやり取りしていましたし、よく手紙を出したりはしていたようです。ただ、それはあくまでも個人的な友好関係で、特に何かを狙ってやっていたわけではない。社会党の人は、そういう裏のルートをつなぐためにお付き合いをするというのはあまりなかったんじゃないでしょうか。

中村：帆足氏以外の社会党議員の人たちはそれぞれに何か独自のルートをもっていたのでしょうか。それとも肖向前さん、劉徳有さんたちを通じてどの議員も接触をしていたと理解してよろしいでしょうか。

坪井：そう思います。

池田：社会党のなかで、たとえば日本の友好団体とつながりがあって、そちらのルートで中国に関わりがあったとか、何らかの団体を通して付き合いがあったようなケースはありますか。

坪井：日中友好協会などの事務局には、終戦時に中国から帰ってきた人たちが何人かいました。日中友好協会における対外的な地位というよりは、事務局員や、事務局長をしているような人たちです。そのなかには延安にいた人も 2 人ぐらいいて、その人たちは当初どちらかという社会党より共産党と一緒に動いていたんだと思います。しかし日本の共産党と中国の共産党が仲違いして、どっちにつくかというので、かなり揉み合いがありましたから。そういうことに社会党はあまり関係がなかったの、詳しくは知りません。

中村：北京に行かれたとき、周恩来その他要人との会談において中曽根や佐藤栄作の評価が出ていたようですが、どんな話をしているなかで自民党の話になったのでしょうか。

坪井：特別には記憶がありませんが、周恩来は一方的に自分の見解を話されていたと思います。それから、「何か質問してもいい」と言うんですが、誰も質問する人はいませんでした。そのときに、中曽根はなんとかで、佐藤栄作はずるい、と言っていたのが印象に残っています。

中村：残されている史料から推測するに、周恩来や毛沢東は、日本側の政治団体で最も信頼できる、頼りにできるのは社会党だと思っていたのではないかなと思われる節があります。そんなふうにお感じになったことはありませんか。

坪井：そうじゃないと思います（笑）。共産党の場合には、最初は同志としてやっていたわけですから、信頼関係があったと思います。〔社会党とは〕そういう思想的な信頼関係は、個人的にはなかったと思いますよ。野坂参三なんかは共産党にずっといたわけですから、そういう線はあったけれども、それを相手にしていたのでは日本との国交とか貿易とか、100 年待っても回復しないと思っていたんだろうと思います。そうかといって、社会党に国交回復への全面的な期待をしたわけではないと思います。そんな力がないことを向こうはちゃんと知っていて、理解していたんじゃないかという気がします。

むしろ、自民党のなかにもいろいろな人がいるでしょう。当時の代表的なところでは、松村謙三さんのグループや、当時はまだ若手だった宇都宮徳馬さんなど。そうした人の周辺は、党派閥は違えども、河野一郎とかと割に近いんですよ。そういう力のある自民党の人たちを中国側は引き留めたかったんだと思います。最初から廖承志事務所、LT 貿易ができて、国交回復も、最終的にまとめたのは田中角栄だった。佐藤だと頭から信用はしていなかったんじゃないかと思います。松村さんとは、それこそ生死をともにするといわんばかりに、毛沢東も周恩来も仲が良かったわけですから。人柄もあるでしょうけれども、あるいはアジア的な人間関係だと思います。根本は、文化的に日本と中国は同じだなど、

いまでも思います。やはり西洋人とああいう関係はもてないと思います。

中村：中国側からすると、もちろん外交権はもっていないですが、それでもやはり友好人士をつくるという意味では、いまお話しくださったように、自民党の親中グループ、それから社会党の人たち、そういう勢力を少しずつ地道につくって、という気持ちはあったのかなと思います。だからこそ、訪中団が行くことができたのだろうと個人的な感想としては思います。

坪井：そうですね。そう思いたいと思います。文革を勉強させて、日本で文革をやる、そういう勢力に育てようとは思っていなかったと思う。金蘇城さんの話を聞いていても、そういう思惑を感じるようなことはありませんでした。どこに行っても、とにかく見てください、という姿勢でした。文革はどういうふうに進んだか、皆さんの目で見て、学ぶところは学んで帰ってください、と。それは口だけではなくて、態度としても、日本で革命運動を起こせなどという押し付けのようなものは全くありませんでした。

中村：当時中国側が、社会党の～～さんに期待しているとか、～～さんを頼りにしたがつているとか、お感じになったことはありませんか。

坪井：いま思えば、実務的な細かいことを相談する相手と、大局を動かすために頼る相手を分けていたのではないかとも思います。社会党では本当にもう中国べったりな人にはそれなりの使い分けをしていました。帆足さんなんかはもともと社会党ではありませんから。中国から帰ってきて、その年に社会党に請われて代議士になってくれといわれて、入党した。最初に訪中したときにはあくまでも参議院の緑風会に所属していた人です。もちろん学生時代はマルクスボーイだったそうですけれどね。

中村：当時の中国側が社会党の誰かに期待しているといったお話を、北京に行かれたときに聞かれたことはないですか。

坪井：ありません。社会党で最も中国と友好的だとされていたなかでの代表格は黒田寿男さん。経歴からいっても年長でしたから。細迫兼光さんという人は、戦後はあまり知られていませんが、戦前、学生時代から弁護士になってすぐにそういう運動に入っていた人です。戦後は社会党に入ったものの、本来なら日本共産党に入っていた人ですね、戦前であれば。そういう人たちを社会党のトップとみなして中国側も付き合っていました。実際的に、もう少し細かいことをするのは、岡田春夫さんだとか、あとは若手で走り回ってやってくれる人が2、3人いました。向こうとしては、そういう人と上手く付き合って、使っていた、という

と言葉が悪いけれど、何かを頼んだりしていたのではないかと思います。私が中国に行くときも、「思想をよく調べろ」というような余計なことを同じ社会党の議員が言ったとかいうことで、むかっときたこともありました。名指しするのは気が引けますが、中国側に対する点数稼ぎとしてこのような気を回したのではないかと思います。

中村：補足的な質問になります。当時の日本の政治団体には、民社党がありましたよね。中国側の史料から明らかですが、民社党は、中国側からすると重要な政治団体の一つで、重視されていました。名古屋は民社党の牙城ですが、名古屋の団体も呼ばれて訪中したりしています。当時の民社党の中国との接し方と坪井様たちの中国との接し方は同じだったのか、少し違ったのか、その点ご記憶のことはございますか。

坪井：記憶としてはありません。少なくとも、一緒にではなかったのではないかと思います。共産党のことはわかりませんが、他の党、自民党、民社党も含めて、私たちが自由に自由に旅行に呼んでもらったりというような、そういう話はあまり聞いたことがありません。ほかの秘書のグループで、向こうへ行って2ヶ月近くも勉強した、なんてことは、自民党その他全部含めてもなかったと思います。

中村：毛沢東や周恩来も民社党について何か評価をしていたりはしませんでしたか。

坪井：特に民社党についてはなかったのではないかと思います。日中関係において代表的な人はいなかったでしょう。

池田：民社党に社会党から移った片山哲さんについて、中国と関連して印象に残っていることはありますか。彼は日中文化交流協会の会長も務めた人ですので、併せて片山哲と文化交流という点で何かありましたらお聞かせください。

坪井：片山さんは立派な方だと思いますが、特別なことはなかったと思います。日中文化交流協会についても、あの人は総理大臣にまでなった人ですから、その肩書きを買われて、会長にいわば祭り上げられたような感じで。あの人が中国側と話をして国交回復を進めるようなことはなかったのではないのでしょうか。政治家としては長老の人ですから、頭に担がれはするけれど、実際に自分で何かをなさるようなルートはもっていなかったと思います。

中村：訪中時の印象に一度戻りますが、先ほど北京のお話や、地方に行ったときのお話など、いろいろと教えていただきました。文革中の地方の共産党員と、中央＝北京にいる共産党員、何か違うという印象はおもちになりましたか。

坪井：質が違うような感じはありませんでした。ただ、地方で会った人たちは、自分たちが文革で揉まれてのし上がった人ですね。革命委員会の幹部になっているわけです。だから得意然とした感じで、勝者の話というような、そういう勝ち話を聞くような感じはしました。北京や上海の人と地方の人に一般的に感じられるような違いはありましたが、それ以上の違いは感じませんでした。

中村：そういう地方の、いわゆる勝ち上がった共産党員の人たちは、どういう目的で、またはどういう気持ちで、坪井様たちを迎えていたのでしょうか。日本と本当に友好的な関係を築きたいと思っていたのでしょうか。

坪井：その頃でさえ、地方に行きますと、戦後日本人を初めて見た、という人がほとんどでした。だから物珍しがって、街に買い物に出るとみんなわーっと集まってくるんですよ。南昌に行ったときのことですが、そこは景德鎮が近くて、焼き物の専門店があるんですね。そこに行ったらもう人が寄ってきて大変な目にあったことがあります。物見高い。北京ではそういうことはありません。

中村：残りの時間で2つ質問があります。一つは、どうして訪中団に参加しようと思われたのか、ということです。最も個人的な動機とは何だったのでしょうか。たとえば戦争に対する贖罪意識、あるいはもっと別なこと、どういうお気持ちが積極的に訪中団に参加させたのでしょうか。もう一つは、帰国された後、個人的に中国の方とどのようにお付き合いされていたのか、ということです。

坪井：一つ目についてですが、中国に行ってみたい、中国の新しい社会主義というのを見てみたい、という思いが最も強かったです。それはロシアに対してもそうでしたけれど。私を含め、その頃の人には社会主義というものに「ユートピア」を求めたものです。現実に存在する社会主義といわれる国はどのようなものなのか。平等に平和な暮らしをしている社会なのか。確かめてみたいと常々思っていました。

中村：当時台湾のことはどのように見ていましたか。台湾は社会主義ではないですし、もう無視していいというような感じでしょうか。

坪井：あまりそんなことを考えた記憶はありませんけれども、特に台湾に対して

悪意をもつとか特別な好感をもつとかはありませんでした。政治問題としても、蔣介石が行った先、程度の認識でした。特に何かを考えた記憶はありません。

中村：訪中団から帰国された後、中国の方々とどのように接点を維持されましたか。どんなエピソードでも結構です。

坪井：劉徳有さんはほとんど日本にいましたから、パーティーに参加したり大使館に行ったりで、お会いする機会がありました。それから金蘇城さんも、文革が終わってから大使館に参事官で来たことがあります。特別な、個人的な付き合いというのはありませんが、時々金さんから、北京の大学で法律を作る準備をしているので、参考になる日本の刑法のテキストなどはないか探してくれといわれたことがありました。その頃は神田に事務所があったし、僕も一応法学部を出ていたものだから、定評のある日本の典型的な刑法の解説書を2冊ぐらい買ってあげました。その頃はまだ1年に1回、建国記念日のパーティーを開いていて、それには呼んでくれました。中国と関係のあるような日本の代議士をはじめ、自民党の人たちも集まるパーティーです。そういう場に、下っ端の、何の肩書きもない僕が入って行って、そういう人たちの顔を見たりして。かなり後々まで中国のパーティーなどには行っていました。

中村：帰国された後は、秘書を辞められ、ご自分で会社を経営されていたそうですね。

坪井：私達が訪中した年の暮れの衆議院解散選挙で帆足さんが落選します。派閥争いにかからむ卑劣な策謀により党公認を取り消されての落選でした。この時以降、社会党は急激に衰退して今日に至っています。

私は秘書を辞した後、適当な就職もなく数年間を過ごしました。その間、国会の超党派で構成する「日中国交回復促進議員連盟」の事務局長・上村幸生さんに手伝ってくれと言われて半年ほど勤めたりしていました。田中角栄首相が衆望を担って北京空港に降り立つ、ちょっと前の頃です。

帆足さんが経営していた（株）新世界レコード社という、社員6、7人でクラシック音楽を輸入、製作する会社があり、その数年前に破綻して看板だけが残っていました。海外の取引先であるソ連、ポーランド、またビクターなどとの清算や処理の交渉を帆足さんに頼まれました。この相手との話し合いをきっかけに、私はこの会社をもう一度生かしてやってみようと決心したのです。今まで銭勘定もセールスも興味も自信も

ありませんでした。不惑の40歳のときでした。金蘇城さんに中国唱片公司を紹介してもらって扱いましたが、あまり売れませんでした。それから「音楽」との奇縁は苦難の20余年。なんとか帳尻を合わせて後進に譲り、今日に至っています。

ついでにお話しますが、私は商談で年に1度はモスクワからヨーロッパのあちこちに出かけていました。1980年ペレストロイカでソ連が崩壊、解体されていゆくさまに交渉の中で触れました。また1990年ベルリンのブランデンブルグ門に押し寄せた数万の群衆の中を、人をかきわけ歩きました。モスクワからワルシャワに向かう夜、汽車でニュースを聞いていたので、西ベルリンに途中下車したのです。日本に帰国して10日ほどして、ブランデンブルグ門が開放され歓喜する人たちの映像をニュースで観ました。

中村：金蘇城さんをはじめ中国とのパイプもあり、そのなかで奥様が日本語教師として北京の人民大学に行かれたとのことですね。それは個人的な依頼という形で直接話が来たのですか。

坪井：直接ではありません。妻はずっと早稲田大学の語学教育研究所で非常勤講師をやっています、大学での窓口となったのは安藤彦太郎先生でした。その頃中国は日本の大学の先生を呼んで日本のことを学ぼうとしていました。日本語科なんかができる頃ですね。それで人民大学にもそういうものをつくって、大使館を通じて、中国人の日本語講師、教授を育てようとした。その窓口が安藤先生だったわけです。たまたまうちにそういう話が来て、子供も連れて行けるならばお引き受けできるということになった。その頃金蘇城さんが大使館にいて、子供も連れて1年間行きたい、と言ったら、「いいよ、自分がその担当の参事官だから」と。それで1、2ヶ月のちに、人民大学に配属されました。その5年後には日本語研修センター（通称・大平学校）にも半年行きました。そういう交流があって、その後、中国で日本語を教えている先生、いわば妻の教え子たちがぞろぞろと日本に留学に来ました。うちに来て、ご飯も一緒に食べたりしていました。いまでも時々電話で話をするくらい家族ぐるみで仲良くしている人が何人かいます。

鈴木：1980年頃は、中国への留学は始まったばかりで、多くはなかった時期です。その頃の思い出で教えていただけることがあればお聞かせください。

坪井：妻が行っているときには私も2回ぐらい行きましたし、旅行ではしょつ

ちゅう行きました。音楽のことも話をしようと思って行ったり。訪中団の後、7、8回は行ったのではないのでしょうか。文革期のような、政治的な雲がかかったような感じがなくなったことは印象的に覚えています。

坪井夫人：北京といっても西の郊外ですから、メインの道路を馬車が走っていたり、そこに乗っている人はランニングシャツに穴が空いていたり、何十年も前に戻ったような感じでした。市場がありましたが、売っているものもひと昔古いのを見ているような感じで。それが生活面での第一印象です。住んでいたところは友誼賓館で、そういう意味では別天地に暮らさせてもらっていたんですけども。私は早稲田に勤め始めてちょうど10年経ったところで、そこを買われて、というのと、夫が中国に行っていたという経緯もあり、お声が掛かりました。ただ、行ったものの、学生はなかなか教えられなくて、私の役割は7人いる中国人の日本語教師の教学水準を高めることだと言われました。教師を相手にする仕事だったので、あまり面白くはなかったです。人数が少ないと、やはり面白くないんですね。学生に教えられるのは9月になってからでした。それから教室を回って先生の教え方を見ると、その先生がどれくらい日本語を使えるかによって、授業時に使っている言葉に差がありました。日本語がほとんどだったり、中国語ばかりの人だったり。私より年上の人で、すべて日本語で授業している人もいました。その差が面白いなと思ったのと、その差がすぐに学生に現れているのも面白かったです。日本語で話したい！という積極的な学生たちでしたから、私の家まで何人も私の荷物を持って送ってくれたのですが、日本人を初めて見た、とやはりそのときに言われました。

令嬢：教室は日本の教室と同じぐらいの広さで、廊下側から窓側まで何列あったのかにわかにはわからないくらい机と椅子で埋め尽くされていて、間を歩くことはできないんです。後ろからも通れなくて、前からしか入れない。70人くらいいたんじゃないかと思います。私は一番後ろで聴講生として授業を受けていました。授業のなかで日本について聞かれたこともありました。私も中国語ができたわけではなかったのですが。たとえば魯迅の小説『故郷』についての授業で、魯迅が日本に行っていたときの話を聞かれました。いま社会問題になっている夫婦別姓については、両親ともにピンジン（坪井）だと言うと驚かれて、一斉に笑われたこともありました。そんなことを覚えています。

鈴木：人民大学附属ですと、お役人など、多分北京の上流家庭の子供たちだと思います。子供同士でどんな遊びをしていたか、覚えていることがありましたら教えてください。

令嬢：私はもう中学生だったので、学校以外で遊ぶ余裕はありませんでした。人

民大附属は入学するのも大変な学校で。テストも平均が 80 点代、90 点代で、みんな必死に勉強していました。それぞれの担任の先生が自分のクラスの平均点で争っているくらいでした。あるときたまたま私が数学の小テストで全部できていたら、ピンジン（坪井）がこんなにできているのに、お前たちはなんでできない！とクラス中が怒られたりしていました。勉強に関する先生の熱心さがすごかったです。

坪井夫人：息子も行っていたのですが、よかったと思ったのは、息子のことを世話してくれる役として、学友が用意されていたことです。何か叱られても息子はわからないので、怒られるのはそのお友達。英語と漢字がわかりますので、とにかく筆談でとても仲良くなったようです。うちの息子の代わりに怒られるのが気の毒、と思いきや、本人はそうでもなかったようで、いまも SNS でつながりはあるそうです。

令嬢：当時の教科書がまだ綺麗なままあります。

中村：まだまだ話は尽きませんが、お約束の時間に達しましたので、本日はこの辺で終了したいと思います。オンラインでの取材となりましたが、誠に有難うございました。深くお礼申し上げます。